

# 若年性脳卒中の病因の検討

岸田 憲弘 今井 昇 八木 宣泰  
小西 高志 芹澤 正博 小張 昌宏

静岡赤十字病院 神経内科

**要旨：**従来、若年性脳卒中は特殊な病態に起因するものが多いとされていた。しかしながら近年、動脈硬化危険因子に基づく発症が増えているとの報告がある。我々は、当院における40歳未満発症の若年性脳卒中について検討を行った。対象は1998年1月1日より2008年5月22日までに入院した20例で、男性13例、女性7例、平均年齢は $33.4 \pm 4.2$ 歳であった。病型は脳梗塞11例、脳出血7例、静脈洞血栓症2例であった。年度別でみると、1998年～2000年0例、2001年2例、2002年3例、2003年0例、2004年1例、2005年3例、2006年2例、2007年5例、2008年4例と増加傾向を示した。明らかな原因を有していた症例が8例(40.0%)；静脈洞血栓症2例、脳動静脈奇形・もやもや病・線維筋性異形成・血友病・薬剤(エフェドリン)・頸部回旋運動による動脈解離各1例、明らかな原因がなく高血圧、糖尿病、脂質異常症、喫煙の危険因子を有していた症例が11例(55.0%)であった。半数以上で高血圧、糖尿病、脂質異常症、喫煙などのコントロール可能な危険因子を有しており、若年時からの動脈硬化危険因子のコントロールが必要と考えられた。

**Key word：**若年者、脳卒中、高血圧、糖尿病、脂質異常症

## I. 緒 言

従来、若年性脳卒中は中高年者にみられる脳卒中とは成因が異なり、特殊な病態に起因するものが多いとされてきた。しかしながら近年、若年者においても高血圧・糖尿病・脂質異常症などの動脈硬化危険因子に基づく発症が増加しているとの報告がある<sup>1)</sup>。若年者では、後遺症を残し学校や職場に復帰できない場合、その後本人、家族および社会が担う負担は大きくかつ長期に及ぶ<sup>2)</sup>。今回我々は、当院における若年性脳卒中の傾向を調査し、診断・治療・予防に際し考慮すべき点について検討した。

## II. 対象と方法

1998年1月1日から2008年5月22日までに当院へ入院した40歳未満の脳卒中患者20例(男性13例、女性7例、平均年齢 $33.4 \pm 4.2$ 歳)を対象とした。診療録を参照し、脳卒中の病型、年齢、性別、発症年度、原因疾患、危険因子(高血圧・糖尿病・脂質異常症・喫煙)について後ろ向きに検討した。

## III. 結 果

病型の内訳は脳梗塞11例、脳出血7例、静脈洞血栓症2例であった。年度別発症数は、1998年～2000年0例、2001年2例、2002年3例、2003年0例、2004年1例、2005年3例、2006年2例、2007年5例、2008年4例と近年増加していた。

原因および危険因子については、明らかな原因を認めたものが8例(40.0%)、明らかな原因がなく通常脳卒中の危険因子である高血圧、糖尿病、脂質異常症、喫煙のいずれかを有していた症例が11例(55.0%)、明らかな原因疾患および危険因子を有さない症例が1例(5.0%)みられた(表1)。原因および危険因子別に検討したところ、若年者に多いとされている原因がみられた症例は8例(40.0%)存在し、内訳は静脈洞血栓症2例、脳動静脈奇形・もやもや病・線維筋性異形成・血友病・薬剤(エフェドリン)・頸部回旋運動による脳動脈解離がそれぞれ1例ずつであった。また、危険因子については高血圧が9例(45.0%)と最も多く、以下、糖尿病4例(20.0%)、喫煙3例(15.0%)、脂質異常症2例(10.0%)と続いた(図1)。